

高齢男性の介護予防サービス利用の
きっかけに関する考察
— 「ゆるやかなきっかけ」に基づく社会的交流を通じて —

京都府立大学大学院公共政策学研究科博士前期課程2回生
会員番号 9710 山本大輔

キーワード：介護予防 社会交流 きっかけ

1. 研究の目的

(1) 現在の高齢男性が過ごしてきた生活状況

- ・ 会社員として、競争社会を生き抜いてきた現在の高齢男性は、他者との協調や交流が苦手
- ・ もともと近隣との交流が少ない場合、退職後、地域の中で孤立しやすい
- ・ デイサービスなどの福祉サービスの利用もつながりにくい

(2) 高齢男性を介護する支援者の声

- ・ 「大きくて重い男性の介護は大変」
- ・ 「もう少し早くからサービスを利用して慣れてくれてたらいいのに・・・」

(3) 高齢男性の介護予防を支援する必要性

様々な機能の低下から要介護状態となることを遅らせたり、軽微な状態でとどめるには介護予防の取り組みが重要である。そのためには、早い段階から福祉サービスとつながり、支援を受けることが効果的である。特に男性の場合、本人が主体的にサービスに参加するためのきっかけが必要となる。

そこで本研究では、退職後の高齢男性が、早期から介護予防に効果的に取り組むために、特に通所型サービス（デイサービス）の利用当初の支援に注目する。そこから本人にとって無理なく参加できる、利用のきっかけについて検討する。

2. 研究の視点および方法

(1) 研究の視点

本研究では、高齢男性の中でも、徐々に体力が低下し、出かけることが億劫になっている人、すなわち要支援認定を受け介護予防の対象となっている人の、社会参加への支援について検討する。先行研究では、要介護・要支援認定を受けない、一般の高齢者の社会参加の状況に関する研究は多く見られるものの、要支援の男性に焦点化したものは乏しかった。

(2) 研究方法

デイサービスを利用する要支援の男性利用者の事例検討を通じて、利用を始めたきっかけやその際の支援について考察する。そのために、個人でデイサービスを運営する管理者へのインタビュー調査ならびに筆者が勤務するデイサービスでのフィールドワークを実施した。

3. 倫理的配慮

本研究は、一般社団法人日本社会福祉学会の研究倫理規定ならびに所属機関の倫理規程に基づき、適切な倫理的配慮を行った。具体的には、調査対象者に対し、調査内容を学会発表で使用する事への了承を口頭および書面で行った。それをもとに所属機関への倫理申請も行なっている。

4. 研究結果

(1) インタビュー調査を実施した事業所の概要

- ・ 定員25名
- ・ 高齢者、障がい者、子どもを対象とし、一元的に通所サービスを提供
- ・ 代表の自宅近くにあった倉庫を改修して開業
- ・ 決まったプログラムはなく、その時したいことをして過ごす
→「自然体で、押し付けない」（事業所代表談）
- ・ 利用時間は皆同じではなく、送迎の時間も柔軟に対応している
- ・ 地域住民から直接利用の相談を受けることもある
- ・ 短期入所事業も併設している

(2) 利用者 A 氏の事例

- ・ 92歳 男性 要支援 1
- ・ 妻と同時にデイサービスの利用を開始→「妻の付き添い」として始めた
- ・ 妻が亡くなった後も、利用を継続している
- ・ マイペースで過ごすことを好み、事業所の近くをひとりで散歩することもある
→職員は付き添うことはせず、遠目に見守っている
- ・ 週に一度、デイサービスを利用し、一人暮らしを続けている

(3) 利用者 B 氏の事例

- ・ 86歳 男性 要支援 2
- ・ 娘夫婦と同居。妻の他界後、家族からデイサービスの利用を勧められた
- ・ 人数の多い事業所は好まなかった
- ・ 若い障がいの利用者との交流を楽しみにしている

(4) 筆者勤務の事業所の概要

- ・ 定員**10**名
- ・ 要支援の利用者のみを対象とする
- ・ 民家の1階部分を使用しデイサービスを運営している

(5) 利用者C氏の事例

- ・ **76**歳 男性 要支援**2**
- ・ 定年退職後、自宅に引きこもり、日中から多量のアルコール摂取を続ける
- ・ アルコールから離れるため、デイサービスの利用を開始
- ・ 本人の意向を尊重し1日ではなく半日での利用
- ・ 利用時間の大半はベッド休養
- ・ デイサービスでは趣味のギターを再開し、職員とセッションを楽しむことが目的となり、利用を継続している

(6) 事例の分析

i 福祉サービス利用のきっかけ

- ・ 妻の付き添い
- ・ 趣味を行えること
- ・ 近所であること

ii サービスが継続することによる本人への効果

- ・ 見守り中心で干渉しすぎないことで本人の主体性を引き出している
- ・ 家族・ケアマネジャーとの連携

→様々な関係者が本人の状態悪化を予見し、早期の対応につなげている

iii これらの積み重ねが結果的に要支援という状態の維持を実現している

5. 考察

(1) 事例から導く高齢男性の福祉サービス利用のきっかけ

- ・自分のためではなく「妻の付き添い」であったこと
- ・自宅の近くにある事業所であったこと
- ・もともとスタッフ（事例では管理者）と顔馴染みであったこと
- ・自分の持つ趣味など、したいことができること
- ・時間に縛られない
- ・世代間交流

→「気軽さ」「近所である」「したいことができる」がきっかけとなる

(2) 次の研究課題

「事業所と地域との関係」「関係機関の連携」「ケアマネジメント」